流山稲門会

【交譲葉】俳句の会 報告

令和六年十二月句会（第一五一回）

兼題　［年忘れ］
催日　令和六年十二月二十八日
開催場所　生涯学習センター
出席者　七名
投句者・選句者　七名

（五点句）

●凩や青葉散らしの勇み足　　寿歩

選評…木を吹き枯らす初冬に吹く強い風を凩というが、この凩早くも吹いてまだ枯れるに早い青葉を吹き散らしている。相撲で勢い余って相手より先に土俵から足が出てしまう勇み足の様だというのである。下五の凩の擬人化が面白い。

ところで、今年は立冬を過ぎても夏日があったりして木の葉の黄変が遅れていて、あながち凩の勇み足とばかりは言えないようだ。（夢心記）

（四点句）

●牡蠣小屋の若き海女らは紅差して　　小牧

選評…　牡蠣という兼題が出されて、できれば調理された後ではなく自然の海に近い情景で作りたいと思った。この句はそれを満たしている。海から上がり冷えた体を小屋で暖め、口紅を差す乙女心と溌剌さが浮かび上がる。（玄鳥記）

●カタッコトッ二両編成小春かな　　寿歩

選評…作者は流鉄沿線を詠んだということだが日本の原風景と重なる。またカタッコトッというカタカナ表現が効果的でぽっかりとした好い陽射しの中、目的もなくこんな電車に乗ってみたいと思わせてくれる。（小牧記）

（三点句）

的矢牡蛎喉を通りて喉泣かす　　艸寛
秋深しロダンの像に禅問答　　艸寛
黒光る鉄骨真青なる立冬　　寿歩
立冬やようやく片す扇風機　　小牧
廃線の立喰ひうどん冬隣　　玄鳥
錦秋の玳瑁のごとく光りおり　　互酬
穏やかな笑顔の人の逝きし秋　　夢心

（二点句）

真牡蠣には酸味の冷酒したり顔　　寿歩
生ガキやぷりっとつるり喉うれし　　互酬
秋の宿土偶と埴輪にめぐり逢い　　互酬
シャブリ空け
オイスターバーにて夜更け迄　　徹心

（投句）

牡蠣喰えば舌が歓び妻笑顔　　徹心
黄の輪より滴落ちたる牡蠣フライ　　玄鳥
生牡蠣を啜りしパリのレストラン　　夢心
雨上り橡落葉累々と　　夢心
無花果の味を探すは八百屋かな　　艸寛
秋の宵チェロとピアノの演奏会　　互酬
落とす実の余震残して大銀杏　　玄鳥
牡蠣の蓋外せず往生幼き日　　徹心
今年また柿はたわわに無人の家　　小牧
牡蠣小屋は笑顔笑顔の家族連れ　　徹心
鈴生りや蜜柑農家の顔に艶　　玄鳥
文豪も学びし母校閉じし冬　　小牧
無人家の柿は小鳥に食われけり　　夢心
秋深し仏は思う世は荒れし　　艸寛

『句会後記』

今月の兼題は「牡蠣」で、冬に向かって美味しいこの海の幸は、なんとも言えぬ味わいがあります。

今回の投句のほとんどが、この美味を何らかの形で詠んでいましたが、小牧さんの句の「紅差す海女」を表現した句が、牡蠣小屋の海女さんの話で談が華やぎました。

発句の内容は昔の生地や幼き頃に体現したもの又、昨今の経験やふとすれ違った情景などを詠む等多岐にわたっていて、自句への内容語彙への深掘りがあり関心するものばかりです。句会を通して各会員の来し方や現況の生活が目に浮かんでくるようで楽しい会です。（互酬記）